

バクティベダンタ・スワミと クリシュナ意識運動

中 野 毅

1. はじめに：西洋世界への登場
2. バクティベダンタ・スワミの生涯
3. ISKCONの創設と展開
4. バクティベダンタの宗教思想
5. おわりに：カルトか宗教か

1 はじめに：西洋世界への登場

1967年1月29日、サンフランシスコのアバロン・ボールルーム (Avalon Ballroom) はグレイトフル・デッド (Grateful Dead), モビー・グレープ (Moby Grape), ジェファークソン・エアプレーン (Jefferson Airplane) ほかのロック・バンドを聞きに来た3,000人ほどの若者で沸き返っていた。「マントラ・ロック・コンサート」(Mantra-Rock Concert) と銘打たれた、このヒッピーの大集会でバクティベダンタ・スワミ¹⁾は中心人物として登場し、2時間にわたるサイケデリックな光が舞うロックショーの開会を告げた。会場はマリハナの煙が立ちこめ、聴衆は「ハレ・クリシュナ、・・・・・・」と唱えながらバンドのサウンドに酔いしれたのである。このコンサートをきっかけに、サンフランシスコのハイト・アシュベリ (Haight-Ashbury) に開いた小さな寺院の早朝礼拝には、毎朝、若者たちが群をなして参加し、信者は急増していった。この時以降、バクティベダンタはヒッピーの様々なイベントに出席し、アメリカ西海岸のヒッピーたちの間で一躍「カルト・ヒーロー」となった²⁾。

頭を剃り、オレンジ色の衣を着て街頭で「ハレ・クリシュナ」と唱えるバク

ティベダントとその弟子たちの姿は、アメリカのみでなく、ロンドンにも登場した。1969年9月にスワミはロンドンに飛び、6人の帰依者を得たが、彼らはバクティベダントの指導に従って街頭布教を始めた。そうした奇抜な衣装と行動は直ちにマスコミの注目するところとなったが、イギリスでの布教に大きく貢献したのはビートルズであり、なかんずくジョージ・ハリソン (George Harrison) だった。ハリソンはバクティベダントがロンドンに寺院用のビルを購入するために尽力した。またビートルズは、クリシュナを讃える詩の入ったレコード「ハレ・クリシュナ・マントラ」を発売した。このレコードは初日に7万枚が売れ、まもなく、イギリスの音楽チャートのナンバーワン・ソングとなった。これをきっかけに、バクティベダントの運動は西ドイツとチェコスロバキアでも反響をよび、成功をおさめた。

こうしてアメリカにおけるヒッピー運動、一般的には対抗文化 (counter culture) 運動の展開とイギリスにおけるビートルズ旋風によって、バクティベダント・スワミと国際クリシュナ意識協会 (The International Society for Krishna Consciousness; 略称 ISKCON) は西洋世界に躍り出た。短期間に、西洋世界にクリシュナ旋風を巻き起こしたバクティベダント・スワミとは、いかなる人物だったのだろうか。

2 バクティベダント・スワミの生涯

バクティベダントは、1896年9月1日、インドのカルカッタで生まれた。カルカッタ大学を卒業し、製薬会社に勤務していた彼は、1922年、彼の信仰における師匠 (guru) となるバクティシッダーンタ・サラスヴァティ (Bhaktisiddhanta Saraswati) と出会い、チャイタニヤ信仰に関心を持つことになる。

1925年、バクティベダントはクリシュナ信仰における聖地である、ヴリンダーヴァン (Vrindavan) に巡礼に出かけた。ヴリンダーヴァンは、ヒンドゥー教の聖地として有名なウタール・プラデッシュ州にある町マトゥラーの北6マイルほどのところに位置し、現在では、ニューデリーからタージ・マハールで有名なアギラ行きの急行列車で1時間ほどで着く。しかし、カルカッタからは北

西に1200kmも離れた場所であり、一大決心のいる巡礼であったと想像される。

ヴリンダーヴァンとはクリシュナの超越的な住処を意味する言葉であるが、インドにあるこの町は五千年前にクリシュナが降臨した場所であり、精神界におけるクリシュナの住処が地上に顕現したものと考えられている³⁾。帰依者にとっては、クリシュナは以来、常に此処に存在し、この町の自然も住民も、出来事や行事もクリシュナの永遠の過去の再現であると信じられている。従って、人間としての完成を成就するための最も重要な方法は、この町に住むことであり、それがかなわないときには、精神の中心に常にクリシュナがいる意識状態「クリシュナ意識」に達すれば、それは精神的にヴリンダーヴァンに住むことになる。現実に住もうと、精神において住もうと、それが成就したならば信者は死に際して魂が自動的に天上のヴリンダーヴァンに転送され、クリシュナの永遠の側近者になると信じられている。それこそが、永遠に続く死と再生の輪廻の苦から解放される道であり、究極の完成と考えられているのである。

15世紀後期につくられ始めたと言われるこの聖地には、ヒンドゥー教の寺院や僧院などが建ち並び、巡礼者でにぎわっている。1918年頃、この地にバクティシッダーンタは僧院とゴウディーヤ・マタ (Gaudiya Math) と呼ばれた布教組織を創設し、ヴリンダーヴァン周辺での巡回説教を始めていた。1932年に師バクティシッダーンタに正式な入門儀礼を受けて弟子になっていたバクティベダンタは、1935年、ヴリンダーヴァンの近郊にあるラダクンダ (Radhakund) の町で、師と3度目の出会いをもった。二人が初めて会ったとき以来、バクティシッダーンタは彼の教養に注目し、チャイタニヤ信仰を西洋に広める必要性和、その信仰についての書物を英語で出版する必要を説いたという。そして、この3度目の出会いの時、師は、それこそがバクティベダンタの人生の使命であり、いかなる犠牲を払ってもこの命令を実現するように強く促した。バクティベダンタは、この瞬間をクリシュナ神が師を等して直接命令したと覚知した。以来、彼はこの覚知を夢や幻視の中で何度も確認し、自分はクリシュナによって導かれていると確信したという。

この体験は、バクティベダンタの人生を大きく変えた。彼は『バガヴァッド・ギーター』の注釈を書いてゴウディーヤ・マタを支援し、また1944年には、英

語の隔週週刊誌『バック・トゥ・ゴッドヘッド』を発刊する。1950年に、彼は54歳で結婚生活を解消して隠退し、6年後には、一人で聖地ヴリンダーヴァンへと向かった。その地で有名なラーダー・ダーモラ寺院に暮らしながら、彼はヴェーダ聖典類の英訳と英語での注釈の執筆に専念し、バクティ信仰（神への信愛）の根本聖典として知られていた、一万八千節からなる『バーガヴァタ・プラーナ』の翻訳と解説の大著を完成した。同時に、師の命令である西洋への伝道をどのように行うべきか、熟慮を重ねたという。ヴリンダーヴァンは、以後、彼の終生の住処となり、ISKCONのインドにおける中心拠点ともなる。

3 ISKCONの創設と展開

バクティベダンタはアメリカに渡る決意を固めるが、それを後援してくれる人物は容易に見つからず、やっとある船会社のオーナーの好意で、無料で渡航できることになった。1965年8月13日、バクティベダンタはついにインドのカルカッタを出帆し、アメリカに向かうことになった。69歳の夏である。26日間の航海の後、バクティベダンタは初めて西洋世界の入り口、ニューヨークに到着した。

入国後の最初の一ヶ月間はペンシルバニアのインド人の後援者宅に滞在したが、やがてニューヨークに居を構え、イースト・ビレッジで若者たちの間に彼独自の方法で布教を始めた。この若者たちこそ、当時、新しいライフ・スタイルを求めて集まってきていたボヘミアン・タイプの若者であり、やがてヒッピーと呼ばれるようになった人々である。彼以前にもアメリカでヨガを教えるインド人はいたが、彼らのほとんどが富裕な年輩者を相手にしていたのと対照的に、バクティベダンタは豊かではないが、新しい人生観を求めている彼らこそ、自分が新しいスタイルでクリシュナについて教えるべき人々であると感じたのである。

1966年春、バクティベダンタはイースト・ビレッジ2番街のアパートメント・ビルの一角に小さな寺院を開いた。そのビルの正面には、以前あった店の“Matchless Gift”（最高無比の贈り物）という奇妙なサインが残されていたが、バクティベダンタはさらに、「国際クリシュナ意識協会、A. C. バクティベダ

ンタ・スワミ、バガヴァッド・ギーターと真正なクリシュナについての講義：毎朝7時」という看板を掲げた。以来、古いサインと新しい看板は奇妙にマッチして、若者の関心を引きつけることになる。7月には、少数ではあるが信奉者の集団も生まれ、「国際クリシュナ意識協会」(The International Society for Krishna Consciousness)は免税宗教法人として正式に登録された。

彼の直感は正しかった。1966年の夏頃までに、アメリカの中流階級文化に幻滅を感じた何千人という若者が、イースト・ビレッジを埋め尽くすようになった。これがヒッピー運動の第一波だった。彼らはアメリカの伝統文化や価値に代わるものを積極的に求めていた。バクティベダンタの講義には、こうした若者が次々に集まるようになり、クリシュナの生誕日とされる9月8日には、最初の弟子11人の入門式を行うまでになった⁴⁾。ISKCONは、イースト・ビレッジ全体のヒッピー運動の象徴的存在の一つとなっていたのである。

最初の弟子の一人が、やがてサンフランシスコに移り、ハイト・アシュベリに寺院用の部屋を借りたので訪れてほしいとバクティベダンタに伝えてきた。イースト・ビレッジでの成功は世界中に伝道する運動のほんの始まりにすぎないと考えていた彼は、この要請にすぐに応じ、翌67年1月にサンフランシスコに飛んだ。そして29日には、冒頭で紹介したマントラ・ロック・コンサートでヒッピー運動の旗手として華々しく登場したのである。このコンサートは、イースト・ビレッジで会ったバクティベダンタをアメリカに出現した真性のグルと考えた詩人アレン・ギンスバーグ (Allen Ginsburg) のアイデアによるものであった。彼はサンフランシスコ・ヒッピーのリーダーの一人であったが、すでにインドでハレ・クリシュナ信仰に出会っており、彼の詩の中でマントラを謡ってもいた。彼の影響力も加わって、「ハレ・クリシュナ、・・・」というマントラの朗唱と踊りは、サンフランシスコの対抗文化運動のすべてのレベルで採りいれられ、多様性に混沌としていたヒッピー運動に、小さいながらも共通の特徴をもたらす要素となるまでになった。

二ヶ月半のサンフランシスコ滞在は大成功を納め、ハイト・アシュベリの寺院を正式に開設したのち、再びニューヨークに戻ったバクティベダンタは、心臓に痛みを覚えた。この時は順調に回復したが、治療もかねてインドにいった

ん帰国することになった。1967年8月、バクティベダントはヴリンダーヴァンに帰ってきたが、この時、一人のアメリカ人の弟子カータナンダを伴っていた。帰国時には、すでにニューヨークとサンフランシスコに ISKCON の寺院が開設されており、近いうちにモントリオール、ロスアンゼルスにも開設が決まっていた。こうしたアメリカでの成功と異国人の弟子を伴った帰国は、旧都ヴリンダーヴァンでも評判になり、彼のグルとしての名声は高まった。

ヴリンダーヴァンへの帰還も長くはなく、翌68年12月に、彼は再びアメリカに戻った。聖典の翻訳作業を精力的に続ける傍ら、弟子を養成し、新しい寺院をつくるために彼らをボストン、サンタフェ、ウェスト・バージニアやロンドンなど世界各地に送り、彼自身もできる限り、それらを回った。こうして1969年9月に、ロンドンに登場したのである。オレンジ色の衣を着た剃髪の男性信者やサリーを着た女性信者の姿が、一躍マスコミで報道され、「クリシュナの朗唱、ロンドン子を驚かす」「幸福はハレ・クリシュナから」などの見出しが踊った。彼らの運動にジョージ・ハリソンやビートルズが大きく貢献したことは、すでに紹介した。ハリソンは、また英訳聖典の発行に必要な資金も提供したり、寺院の購入と創設にも尽力した。バクティベダントは同年の暮れにロンドン寺院を正式に開設した後、ボストン寺院を開設するために、アメリカに戻った。イギリスでの滞在は9月から12月までの僅か3ヶ月間であったが、ハレ・クリシュナ旋風はイギリス中を巻き込み、さらにヨーロッパ各地の若者へと伝播していったのである。

ボストン寺院のオープンの後、バクティベダントはロスアンゼルスに飛んだ。ロスアンゼルスでは、ISKCON が土地を所有した初めての寺院が開設された。ここには信者が共同生活するコミュニティも建設され、バクティベダントはロスアンゼルス寺院を ISKCON の本部とし、彼らの運動を世界に広める拠点とした。ISKCON の寺院は、その後、トロント、モントリオール、パリ、アムステルダム、モスクワ、そして東京と増えていった。

1971年11月、バクティベダントは再びヴリンダーヴァンに戻り、悲願であった故国インドでの ISKCON 寺院建設に着手した。それは西洋に受け入れられたバクティベダント流のクリシュナ信仰が伝統的なインドのヒンドゥー世界に

受け入れられるかどうかという、重大な意味を持っていた。彼は、ベンガルのマヤプール、ボンベイ、そしてヴリンダーヴァンの3カ所に寺院や僧院、海外からの巡礼者のためのゲスト・ハウスなどを立てたいと考えていた。マヤプールは15世紀の聖者チャイタニヤの生まれた場所であり、ボンベイは物質文化で退廃した救済すべき町であり、またヴリンダーヴァンはいわずとした中心的聖地であり、彼にとって最も重要な場所であった。また、67年の帰還の時は1名の弟子を伴っただけであったが、今回は50名ほどの異国の弟子や信者を連れての帰国であり、ヴリンダーヴァンの町に一大センセーションを巻き起こした。彼らは一応歓迎はされたが、異国のヒンドゥー教徒に敵意や疑惑を持つものもいた。バクティベダンタは「クリシュナはヒンドゥー教徒やインド人のためのみの存在ではない。クリシュナはすべての人類の救世主であり、クリシュナ意識を保ったものは、もはやアメリカ人でもカナダ人、オーストラリア人でもなく、等しく主クリシュナの信徒者である」と強調してやまなかった。

ヒンドゥーの聖地に、異国生まれの弟子や信徒が等しく受け入れられ、ISKCONの寺院や施設が町の一角に正式に建設されることが、彼らの信仰の正統性を証明する上でも必要であった。数々の困難には遭遇したが、ヴリンダーヴァンにおけるISKCONの寺院である「クリシュナ＝バララム寺院」(Krishna-Balaram temple)とインターナショナル・ゲスト・ハウスは、1975年4月20日、ラーマ神降臨記念祭の日に完成した。この開院式には、600名の海外からのISKCON信徒と、数百名のインド人信徒やインド政府代表が参列し、盛大な祝典が行われた。また、2年後の1977年、バクティベダンタが死去する直前に、ISKCONの子供たちを一般のインド人子弟とともに教育するための学校も建設された。

1977年11月14日、バクティベダンタ・スワミ・プラブパーダはヴリンダーヴァンにて死去した。その81年間の生涯のうち、晩年の69歳になって単身アメリカに渡った後の12年間の活動は、確かに目を見張るものであった。布教のため地球を14周したともいわれ、百以上の寺院、共同体(Ashram)、農場、研究所、ヴェーダに基づく学校などを各地に建設した。このような展開を可能にした組織上の整備も、彼自らの発案でなされた。1970年にISKCONの管理委員会

(Governing Body Commission) を設置し、その委員会のもとでアメリカを6つの地域に、またアメリカ以外の地域を6つに分け、世界を12の地域に分けて管理運営することにした。12名の委員はバクティベダンタが活着している間は彼が個人的に任命したが、死後は各寺院の院長による会議で3年任期の委員を選んでいる⁵⁾。管理委員会と寺院長による一種の集団指導性が、基本組織の管理運営に導入されたことによって、特定の人物に権威や権力が集中する弊害をさける結果になったといえよう。また、彼は『バガヴァッド・ギーター』や『バーガヴァタ・プラーナ』などの重要なヒンドゥー聖典を英訳・解説し、また『カミング・バック』などの自身の著作も多数著し、インドの伝統思想を西洋に紹介するのに大きく貢献した。

4 バクティベダンタの宗教思想

短期間のうちに西洋世界での成功を収めた、バクティベダンタの宗教思想、言いかえれば ISKCON の理念とはいかなるものであったのか。そして、彼らの何が西洋の若者を引きつけたのか、考えてみたい。

バクティベダンタの宗教思想、またそれを受け継いだ ISKCON の宗教思想の第一の特徴は、チャイタニヤーによって強化されたクリシュナ信仰にある。ヒンドゥー教は前身のヴェーダの宗教伝統を受けて基本的には多神教であるが、種々な神々の背後に「最高神」の存在が予想され、これがブラフマン（創造神）、ヴィシュヌ（持続神）、シヴァ（破壊神）として顕現すると考えられている。三神一体説である。さらに教理的には三神一体と考えられたにしても、ヒンドゥー教が発展していくにつれて、実際にはヴィシュヌとシヴァの二神に対する信仰が強調され、これらのうちどちらを主神とするかで、多くの系譜が存在する。多神教的な形の中に、実はつねに一神教的な傾向が潜在しており、その傾向がヒンドゥー教の改革運動が起こるときに、しばしば顕在化するといわれている⁶⁾。

バクティベダンタが信奉した思想は、このうちヴィシュヌ神崇拝の系譜に属する。ヴィシュヌ神は古くは紀元前十世紀ごろに成立した『リグ・ヴェーダ』に登場するヴェーダの神々のなかの一つであり、全宇宙を三步で踏み越え、天

界をささえ一切の万物を安住せしめる慈愛に満ちた神としてたたえられた。やがて、紀元前四世紀頃のヒンドゥー教の成立に伴って編纂された叙事詩『マハーバーラタ』において、シヴァ神と勢力を二分する主要神として描かれるようになり、次第に唯一最高の神として一神教的な性格を付与されていくようになる。

また、叙事詩においてヴィシュヌと同一視される神格のうちで、最も重要なのがクリシュナ神である。クリシュナはもともと実在の英雄で、前七世紀以前に北インド中央部を本拠とするヤーダヴァ族の一員として、デーヴァキーを母として生まれたという。この英雄クリシュナに対する信仰はやがて、ヴルシュニ族の奉ずる一神教的なヴァースデーヴァ教や、牛飼のアービーラ族の奉ずる牧主（ゴーパーラ）への信仰と混ざり合って統合され、バラモン教圏外で有力な宗教となり、その後さらにクリシュナが古くからのヴィシュヌ神やナーラーヤナ神と同一視されていくことで、バラモン教の中にも取り入れられていった。このクリシュナはインドの民衆に最も親しまれている神格の一人であり、悪戯者で怪力持ちの少年、色白で非常にハンサムな青年であって、いつも多くの牧女にかこまれ、笛を吹いたり踊り戯れる神として描かれている。こうした「クリシュナ伝説」が形成されて、民衆の間に広まり、「クリシュナ伝説」の流布を通して、むしろヴィシュヌ信仰が一般民衆に広まったとも言われている。このクリシュナが、『マハーバーラタ』に編入された詩篇『バガヴァッド・ギーター』においては英雄としてあらわれ、バラタ族の大戦争に参加してアルジュナ王子などの五王子軍に味方するとともに、ヴィシュヌ神の化身として神格化され、最高神（バガヴァーン）として扱われていくようになっていった⁷⁾。

バクティベダンタは、この『バガヴァッド・ギーター』を最も重要なヴェーダ文献ととらえ、ギーターに表れた至上者としてのクリシュナに従えと強調する。「バガヴァッド・ギーターはバガヴァーン（至上者）が自ら語られたものなのだから、これ以外のヴェーダ文献は何一つ読む必要はない。ただ、ていねいに、また規則的に読んだり、聞いたりすればよいのである」⁸⁾。ギーターを重要視する理由の一つは、唯一神への精神的帰依を強調する「信愛（バクティ）」の教説が説かれているからである。ヒンドゥー思想においては、業（カルマ）

の繫縛を断ち切り、輪廻から解脱することが第一の目的とされるが、ギーターは、解脱への道、修行法を三つに分けて説き、その人の性格や力量に応じた方法を教えている。それは靈魂と肉体の関係を正しく認識する知識に基づくジュニヤーナ・ヨーガ（知識の道）、結果を顧みない本務の遂行にもとづくカルマ・ヨーガ（行為の道）、神に対する熱烈な信愛と絶対的な帰依に基づくバクティ・ヨーガ（信愛の道）の三つである⁹⁾。このうちギーターにおいて特に強調されたのが、バクティ・ヨーガであった。他の二つのヨーガが専門的な知識の獲得や出家による苦行など、一般の人々には困難な条件を要求しているのに対し、そのような精神的物質的な条件の整わない下層カーストの人々であっても、日常の生活のなかで、ただ熱烈な最高神への信仰を捧げるならば神の恩寵が与えられて解脱できるという教えは、極めて魅力的であったに違いない。ギーターが広く親しまれ、クリシュナが人々に敬愛された理由もそこにある。

「ゆえにアルジュよ、常に私のことを想って、同時に定められた義務を遂行して戦うのだ。心と行動を常に私に固く結びつけ、何ごとも私のために行え。そうすれば必ず私のところにくるだろう」(Bg. 8.7)。「その心を他のものに向けることなく、私を思念しつつ信仰する人々、これらのつねに信愛に満ちているものに、私は至福（解脱）を与える (Bg. 9.22)。「実に、プリターの子（アルジュ）よ、私に帰依するものたちは、たとえ卑しい生まれのもの・女性・ヴァイシャ・シュードラであっても、最高も目的（解脱）をうる」(Bg. 9.32)。

このように説かれるバクティ・ヨーガを、さらに情緒的感情的帰依を強調して、全身全霊を捧げる行為として実践したのが、15世紀に出現したチャイタニヤであった¹⁰⁾。チャイタニヤは、もとの名をビスムバル(ヴィシュヴァムバラ)・ミシュラといい、父ジャガンナータ・ミシュラ、母サチー・デービーの子として1485年に生まれた。死後に書かれた伝記によると、幼少の頃から多感で、神懸かり的な激情とディオニソス的な陶醉癖があったという。24歳の時、結婚を解消して世を捨て、以来、ヒンドゥー聖者としての生涯を、大半はベンガル湾に面したジャガンナータ神の聖地ブリーでおくった。その間に、南インドや北インドのヴリンダーヴァンまで旅をしたという。チャイタニヤは、クリシュナこそが最高神であること、彼への信愛はクリシュナと妻ラーダとの性愛をとも

なう、時としてエロティックともいえる愛に表現されるような情緒的、感情的、官能的なものであることを熱烈に歌い上げた。神懸かり的な踊りと激情的な説教、最高神を愛する情熱は、当時の形式的な宗教儀礼に飽きたらなさを感じていた人々の心をとらえ、老若男女が群をなして、参加していった。彼の集会では、愛の神ハリ神を賛美するときに信者たちの興奮が徐々に激しさを増し、大声で賛美している者のなかには意識を失って倒れる者まででたという。チャイタニヤ自身がそうであった。彼はやがてクリシュナ・ヴィシュヌの化身であると見なされるようになり、聖人伝説につきものの数々の奇蹟物語もうまれていった。

チャイタニヤの運動は、15世紀の北インド一帯に広がったヴィシュヌ神復興運動の一つとしてとらえられており、最高神への強烈で情緒的な信愛を訴えて、形式主義に墮落した正統ヒンドゥー教を批判した。同時に、彼は下層カーストやイスラム教徒をも弟子として受け入れており、当時のカースト制度への批判がこめられていた運動であった。

バクティベダンタが師バクティシッダーンタから受け継いだ信仰は、以上のような最高神クリシュナを全身全霊でもって信愛する強烈な信仰であったと考えられる。しかも、それはヒンドゥー教一般の多神教的宗教世界ではなく、チャイタニヤによって頂点にまで達した唯一神教的なヴィシュヌ＝クリシュナ神への絶対的な献身、無私の奉仕を強調するものであった。ここにバクティベダンタの宗教思想の第一の特徴があるといえる。アメリカの宗教的伝統の基底に流れる、ピューリタンの神への信仰、神への愛との平行関係が見て取れる。ヒッピー運動に投じた当時の若者が、形骸化し慣習化してしまったアメリカのキリスト教文化とは対照的な、生き生きとして情熱的な、しかも純粋な、もう一つの宗教的世界に魅力を感じたとしても不思議ではない。

バクティベダンタが師のチャイタニヤ信仰から受け継いだもう一つの側面は、この世に化身する神という理念である。ヒンドゥー教の伝統においては、クリシュナにしてもチャイタニヤにしても、歴史上の實在の人物であり、それは化身として現世に再生した最高神と考えられるようになり、様々な伝説が付加されていった。そのなかで描かれる神の化身の姿は、人間の世界を遙かに超越し

た世界で君臨している絶対他者としての神ではなく、愛を営み、悪戯をし、謡ったり踊ったりする、ある意味で生々しい体温を感じる神であった。そうした人間的な神々への驚きと親しみというアンビヴァレントな魅力を、アメリカの若者が感じたことも事実であった¹¹⁾。

チャイタニヤ信仰から受け継いだ第3の要素は、マントラの朗唱と踊りである。バクティベダンタはギーターの解説のなかで、「主はアルジェに向かって、『自分の仕事を捨てる必要はない、ただ仕事をするにあたっては、常にクリシュナを想え』とおっしゃった。主チャイタンニヤもこの点を強調されて、主の御名を常に唱えよとおっしゃった。主の御名と主とはおなじである。だから、主クリシュナがアルジェに与えられた『わたしを想え』という教えと、主チャイタンニヤの『主の御名を唱えよ』という指示は同じことである」¹²⁾と述べているが、これはすでに述べたチャイタニヤによるクリシュナ信仰を継承していることとを意味するとともに、クリシュナへの信愛を「御名を唱える」というマントラの朗唱へと定式化したことを示している。「全世界の人々の愛の対象——神はシュリー・クリシュナひとりだと言いたい。そしてまた、唱える^{マントラ}真言は一つ——ハレー・クリシュナ、ハレー・クリシュナ、クリシュナ・クリシュナ、ハレー・ハレー／ハレー・ラーマ、ハレー・ラーマ、ラーマ・ラーマ、ハレー・ハレー。そして全世界に真の仕事はただ一つ——バガヴァーンに、全身全霊で仕えることである」¹³⁾。このように、彼らはハレー・クリシュナ、・・・というマントラを唱え、また、クリシュナとチャイタニヤの伝説にある踊りを踊るのである。

このマントラの朗唱と踊りは、心の中で静かに神に祈るというプロテスタント的伝統からは、かなりかけ離れた行為であり、異質性を感じる要素であったと思われる。しかし、そこに対抗文化としての対照性の極みが見いだされたと考えられし、当時注目されだした「身体性の復権」を感じさせる要素であったともいえる。

チャイタニヤ信仰との関連で重要な第4の要素は、ジャガンナータ(Jagannatha)神像への崇拝である。ジャガンナータはクリシュナ神の化身の一形態で、「宇宙の主」(Lord of the Universe)としてインドで崇拝されており、

チャイタニヤが拠点としたオリッサ州の聖地プーリの中心寺院で、妹スバードラ、弟バララムとともに祀られている。逆三角形の大きな頭に大きな丸い目、ずんぐりとした小さな軀と短い手足という奇妙な姿をしたジャガンナータ神像の木彫りが、1967年3月初旬、サンフランシスコの寺院に裸足の少年によってもたらされた。それをジャガンナータ神と見抜いたバクティベダンタによって、他の2神と一緒に16インチの大きな木彫像につくりかえられ、祭壇に安置された。以後、サンフランシスコ寺院は「新しいジャガンナータ・プーリ」と呼ばれるようになった。このような神像崇拜を取り入れることはヒンドゥー教の伝統からいっても必ずしも正統な形式ではないが、偶然にもたらされたことをクリシュナの意志と見なしたバクティベダンタは、躊躇なく取り入れたのである。

この神像は北米インディアンの木彫り像にも似て、極めてサイケデリックな形態をしていたため、結果としてはヒッピーたちに大歓迎されることになった。信者の一人が神像をゴールデン・ゲート・パークに持ちだすと、周りにヒッピーの群が集まり、マントラを唱えながら踊りだした。その報を聞いたバクティベダンタも公園に急ぎ、ジャガンナータの隣でマントラを唱え出すと群衆の輪ができたという。サイケな神は、大ヒットしたのである¹⁴⁾。

5 おわりに：カルトか宗教か

バクティベダンタが ISKCON 運動の中で説いた教説と儀礼は、チャイタニヤの影響を強く受けたものであった。そのような宗教思想のなかに、アメリカのピューリタン文化に通底する要素と、それに対抗する代替文化的要素の両方を読みとることができる。アメリカの若者は、そのアンビヴァレントな魅力に惹かれていったのである。

ISKCON の運動には、他にも多くの対抗文化的要素をもっている。本稿では詳しく紹介する余裕はないが、オレンジ色の衣、女性のサリー姿などの服装をはじめ、男子は三つ編みのポニーテールを残して剃髪し、額から眉間にかけて白いチャイタニヤ派独特の紋様を描くなどは、全く異質の文化的要素といえよう。また食生活の面でも、彼らはヴェーダ哲学を基礎にした料理哲学をっており、完全な菜食主義を保っている。10～15もの段階のある手の込んだ菜食



写真1 ゴールデン・ゲート公園でのジャガンナータ神像とスワミ



写真2 サンフランシスコ寺院に祀られたジャガンナータ神と2神

主義のヴェーダ料理をとるともいわれている。その食事法は一般の健康食ブームにもあやかって注目を引き、1982年にはアメリカだけで9つの農場と十数カ所のヴェジタリアン・レストランを経営していたという¹⁵⁾。こうしたアメリカの主流文化とは異質な生活様式を維持するためにも、彼らはまたアシュラムと呼ばれる、寺院を中心とする共同生活の施設をもち、多くの信者が生活をとみにしている。仏教でのサンガに相当するものといえる。毎朝午前3時頃に起床し、食事や一日の仕事を始める前に、祈りとマントラの朗唱を行う。毎日16回の朗唱を行うことになっていて、一回の朗唱には、数珠の玉の数である108回繰り返す。

このような ISKCON の宗教運動は、1960年代末から70年代にかけて起こった対抗文化 (counter culture) 運動、通称、ヒッピー運動の最盛期には、まさにその異質性の故に、伝統文化に幻滅し、反抗した多くの若者を魅了した。しかし、70年代後半にはいると「古き良きアメリカ」を再興しようとする保守化、右傾化の風が吹き始める。レーガン政権の誕生は、その象徴である。こうした保守再興の潮流のなかで、ISKCON をはじめとする多くの新宗教運動は、その異質性、対抗文化性ゆえに、伝統的な信仰、家族、倫理を破壊する危険な「カルト」として批判攻撃のターゲットととなった。いわゆる「反カルト運動」の展開である。この運動は、当初は「カルト」に子供を奪われたと怒る親たちの小さな運動であったが、70年代の中頃には全米で3,000名から4,000名が参加し、大小の数十におよぶ反カルト団体が結成された。しかも、これらの諸団体は相互に連携し、ネットワークを形成して情報の共有と運動の効率化をはかり、なおかつマスメディアや政治家の介入を誘うことで、極めてセンセーショナルな運動となった。さらに、そのネットワークは合衆国に限られることなく、北米、中南米、ヨーロッパ、オーストラリア、そして日本などのアジアへと展開し、ある意味で、今日的なグローバルな運動として展開したのである¹⁶⁾。

ISKCON も、この反カルト運動の渦中に巻き込まれた。1977年、ISKCON は16歳の少女を「洗脳」によって入信させ、教団内に「強制監禁」したなどの嫌疑で告訴されたのである¹⁷⁾。この裁判は15年近くも争われ、訴えた原告側は名だたる反カルト運動家を動員しての裁判となり、反カルト感情をあおるマス

コミの格好の話題となった。原告側はその主張の理論的支柱となる専門家として、カリフォルニア大学バークレー校心理学準教授のマーガレット・シンガー (Margaret Singer) 女史を二日間にわたる法廷証言に立たせ、ISKCON への改宗が洗脳またはマインド・コントロールに基づくものであることを立証しようとした。それに対し、D・アンソニー (Dick Anthony), T・ロビンス (Thomas Robbins), J・リチャードソン (James T. Richardson) などを中心とする約20名の宗教社会学者は、所属する「宗教社会科学学会」(SSSR) を代表して法廷助言書を提出し、それらの主張が科学的には根拠のないものであることを主張するなど、「カルト」をめぐる一大論争が展開されたのである。この事例を改めて集約的に論じたりチャードソンは、この法廷助言書が洗脳理論に基づく主張を退ける上で大きな影響を及ぼしたと評価している。彼によれば、シンガーの主張する「洗脳理論」の根拠となる「心理的社会的影響の体系的操作」(SMPSI) なる理論は心理学的にも妥当性を持たず、また8年前の改宗を洗脳によると断定したシンガーの調査は極めて短時間の形だけのものであって、約40件ほどのカルト裁判に関与しているシンガーの証言と比較して検討すると、カルトの多様性や原告・被告の特殊性や個人差を全く無視したステレオタイプの、個人的な反カルト感情の優先した非科学的なものであると断言している。

この裁判は、最終的にはカリフォルニア州最高裁判所で、未成年の女子を両親の意志を無視して教団内で保護したことの行き過ぎや、両親へ精神的苦痛を与え、父親の死の間接的な要因となったことなど一部を ISKCON の責任に帰したが、反カルト運動家らが強調していた入信過程での「洗脳」や「強制監禁」の事実は認められないという判断が下され、ISKCON がヒンドゥー教の伝統に依拠した真正の宗教運動であることが間接的に認められた。しかし、この裁判や統一協会その他の新宗教運動をめぐる数々の裁判やマスコミ、反カルト団体からの批判は、アメリカの伝統的な宗教文化と異なる宗教運動への偏見や拒否感情の強さを物語っている。現在、ISKCON の信者は全米で約3,000人であり、そのうちアメリカ人は500人ほどである。ロスアンゼルス寺院には、190人ほどの信者が共同生活をしている¹⁸⁾。これ位の規模の運動が、アメリカの伝統文化の脅威になることはあり得ないが、異質な宗教文化と生活スタイルを維

持する彼らが、アメリカ社会に受け入れられて定着するには、彼ら自身のアメリカ社会へのある程度の順応とアメリカ社会自身の文化的多元化、文化的寛容がさらに求められているといえよう¹⁹⁾。

注

- 1) バクティベダンタの名は、Abhey Charan De であり、A.C. Bhaktivedanta Swami として知られていた。その後、スワミのグルが“master at whose feet other masters sit”を意味する Prabhupad と呼ばれるのを学んだ信者たちが、彼を同じ称号で呼ぶようになった。従って今日では、彼の名は A.C. Bhaktivedanta Swami Prabhupada (A.C. バクティベダンタ・スワミ・プラブパダ) と呼ばれる。また、信者たちは親愛の情をこめて、Shrila Pubhupad (シュリーラ・プラブパド) とも呼ぶ。Charles R. Brooks, *The Hare Krishans in India*, Princeton University Press, 1989, chap. 4, note. 3, p. 74.
- 2) Ibid., p. 79.
- 3) A.C. バクティベダンタ・スワミ・プラブパダ著『バガヴァッド・ギーター；あるがままの詩』I. クリシュナ意識国際協会日本支部訳・刊，28頁。
- 4) 当時の若者が、どのようにしてバクティベダンタの教えに関心を示していったかについては、Hayagriva dasa, *The Hare Krishna Explosion; The Birth of Krishna Consciousness in America (1966-1969)*, Palace Press 1985. が参考になる。
- 5) D・プロムリー，A・シュウブ『アメリカ「新宗教」事情』ジャブラン出版，1986年，66-67頁。
- 6) 菅沼晃『ヒンドゥー教—その現象と思想—』評論社，1976年，24頁。
- 7) ヴィシュヌ神，クリシュナ崇拜などの展開については，同前『ヒンドゥー教—その現象と思想—』46-67頁，R.G. バンダルカル『ヒンドゥー教—ヴィシュヌとシヴァの宗教』せりか書房，1993年，26-36頁を参照。『バガヴァッド・ギーター』の内容を手短に知るには，同前・バンダルカル，第五章が参考になる。
- 8) 前掲『バガヴァッド・ギーター；あるがままの詩』I，91頁。
- 9) ヨーガはもと語根 yuj から派生したことばで，この動詞語根は元来「牛に軛を結びつける」「馬に葬具をつける」という意味から，「ある対象に心を集中する」という意味になった。ヨーガは『カタ・ウパニシャッド』(2・6・10-11)において「精神作用の制御・統一」の意味で用いられて以来，解脱に関する教説に必ず用いられることばの一つとなった。ギーターにおいてもヨーガは実践・修練・修行をあらわすことばとして用いられている。菅沼，112-120頁。
- 10) R.G. バンダルカル前掲書，235-245頁。ニロッド・C・チョウドリー『ヒンドゥー教』森本達郎訳，みすず書房，1996年，348-358頁。
- 11) Hayagriva dasa, (op. cit.), p. 11.

- 12) 前掲『バガヴァッド・ギーター；あるがままの詩』I, 84頁。
- 13) 同前書, 93頁。
- 14) Hayagriva dasa, op. cit., pp. 158-163.
- 15) 生駒孝彰『迷えるアメリカの心』二十一世紀図書館新書0059, P H P 研究所, 1985年, 15頁。
- 16) Anson D. Shupe, Jr., David G. Bromley, Donna L. Oliver (eds.) *The Anti-Cult Movements in America*, Garland Publishing, NY., 1984, p. 29.
- 17) 「ジョージ対クリシュナ意識協会」裁判 (Robin George and Marcia George vs. ISKCON, Ca. App., unreported (1989), cert. requested, No. 89-1399 (1989))。この裁判および類似の反カルト裁判とその問題点については, James Richardson, "Cult/Brainwashing Cases and Freedom of Religion," *JOURNAL OF CHURCH AND STATE*, Vol. 33, No. 1, 1991, Winter. に詳しく述べられている。また, この件を含むアメリカの反カルト運動については, 中野毅「反カルト運動とアメリカ・ナショナリズム」, 中野毅他編『宗教とナショナリズム』世界思想社, 1997年, 95-123頁を参照のこと。
- 18) ロスアンゼルス寺院長スワバーサ・ダーサ氏へのインタビュー (1994年11月)。
- 19) イギリスにおいても必要以上の論争とスキャンダル合戦を避けようとする試みが, ISKCON および社会一般の双方でなされるようになった。ビートルズ・メンバーだったジョージ・ハリソンが寄付した邸宅は, Bhaktivedanta Manor と称されて信者のセミナー・ハウスやトレーニング・センターとして活用されていたが, 近年, イギリス在住ヒンドゥー教徒たちの祭礼の中心地となり, 時には年に数万人が訪れるようになった。そのため近隣の人々の生活を脅かすという訴えが起こり, 当局は使用を禁じようとしたこともあった。法廷闘争も行われたが, 近年, その施設を祭礼に用いることを認めるとともに, 近隣の生活を妨げないように新しい道路を建設することで和解が成立したという。共存への新しい試みとして注目される。James A. Beckford, "'Cult' controversies in three European countries", *Journal of Oriental Studies*, Vol. 8, 1998. M. Nye, 'Hare Krishna and Sanatan Dharm in Britain: the campaign for Bhaktivedanta Manor', *Journal of Contemporary Religion*, Vol. 11 (1).